

モモ新品種「さくひめ」について

佐賀県果樹試験場 落葉果樹研究担当 原口 俊輔

1. はじめに

モモの正常な発芽・開花が行われるためには、冬に一定期間の低温への遭遇が必要となります。本県のモモ加温栽培では7.2℃以下の低温に800時間以上遭遇してから加温を開始しています。近年、冬季の気温が上昇傾向にあることからモモの加温開始時期である1月下旬においても低温要求量が満たされないケースが発生しています。今回は、農研機構果樹研究部門によって育成された低温要求量が少なく、果実品質に優れる早生品種「さくひめ」について紹介します。今後、冬季の気温上昇による休眠覚醒に必要な低温の獲得が懸念される中で、モモの安定生産を行うための有望品種と考えられます。

2. 【露地栽培】「さくひめ」生育・果実特性（育成地：茨城県つくば市）

- ・低温要求量の少ない品種「Coral」と「ちよひめ」等を交雑して育成され、低温要求量は既存品種より少ない約560時間とされています（表1）。

表1. モモの品種ごとの低温要求量（農研機構）

品種	低温要求時間 (h)
さくひめ	555
日川白鳳	1173
あかつき	1176
川中島白鳳	1208

注) 切り枝法による4年間(2012-2015年、茨城県つくば市)の調査結果。

- ・花芽は多く着生し、花粉を有し、生理落果も少ないため結実は良好です。
- ・育成地では、「日川白鳳」と比較して開花盛期は9日程度早い3月下旬、収穫盛期は5日程度早い6月下旬です。
- ・硬核期は「さくひめ」は満開後約55日から70日、「日川白鳳」は満開後約45日から60日とされています。両品種ともにと硬核期間は同程度ですが、「さくひめ」は硬核開始の満開後日数が約10日遅くなります。
- ・ブラジルの品種「Coral」を親としているため、「日川白鳳」に比べて果皮の地色に緑色が残りやすい特徴を持っています。
- ・果皮の赤く着色する部分は、「日川白鳳」に比べて同等かやや少なくなる傾向があります。

- ・ 果実の重さは 250g 程度、果肉色は白色、糖度は 12 程度、pH4.6 程度と酸味は少なく「日川白鳳」と同程度で食味は良好です（表 2）。
- ・ 核割れの発生が非常に少なく、青果率の向上が期待されます。

表 2. モモ露地栽培における品種ごとの果実品質（農研機構）

品種	開花盛期	収穫盛期	果実成熟日数	果実重 (g)	糖度 (Brix)	pH
さくひめ	3/27	6/26	91	253	12.8	4.6
日川白鳳	4/5	7/1	87	250	12.2	4.3

注) データは 4 年間 (2012-2015 年、茨城県つくば市) の調査結果の平均値

3. 【加温栽培】「さくひめ」生育・果実特性（果樹試験場：佐賀県小城市）

- ・ 樹勢は強く、枝の発生も多いため、幼木期では「日川白鳳」、「ちよひめ」より樹冠面積の拡大が早いです。
- ・ 樹冠の拡大が早く、結実性に優れることから、結実初期の収量は「さくひめ」が最も多く（表 3）、早期多収が期待されます。

表 3. モモ加温栽培の幼木期における品種ごとの樹冠面積および収量（佐賀果試）

品種	樹冠面積 (㎡) / 樹	収量(kg)/樹
さくひめ	8.0	11.2
日川白鳳	7.0	0.9
ちよひめ	5.5	1.9

注) 2021 年 4 年生樹の調査結果。

- ・ 佐賀県果樹試験場における加温栽培では 2 月上旬の加温開始の場合、「日川白鳳」と比較して開花盛期が 10 日程度早い 2 月下旬、収穫盛期は 5 日程度早い 5 月下旬です。
- ・ 結実初期における果実の重さは 200g 程度、果肉色は白色、糖度は 12 程度、pH4.7 程度と酸味は少なく、育成地と同様に食味は良好です（表 4）。
- ・ 佐賀においても核割れの発生は「日川白鳳」、「ちよひめ」と比較して少ないです。

表 4. モモ加温栽培における品種ごとの果実品質（佐賀果試）

品種	開花盛期	収穫盛期	果実成熟日数	果実重 (g)	糖度 (Brix)	pH
さくひめ	2/24	5/18	83	196.9	12.0	4.7
日川白鳳	3/8	6/2	86	216.3	12.3	5.1
ちよひめ	3/2	5/14	73	197.1	10.8	5.0

注) 2021 年 4 年生樹の調査結果。加温開始は 2 月 8 日。



図1. 「さくひめ」の果実外観（佐賀果試）

4. 栽培上の留意点

- ・「さくひめ」は幼木期の新梢伸長が旺盛なため、生育期の新梢管理が特に重要となります。
- ・開花期が早く、露地栽培では晩霜害を受けるリスクが他の品種より高い可能性があります。
- ・露地栽培では裂果が「日川白鳳」よりも多く発生する場合がありますため、袋掛けが必要です。
- ・育成地では果実は 250g 程度まで肥大しますが、九州地方では生育が急いだ場合、果実が小さくなる可能性があります。また、結実性に優れることから、着果過多とならないように摘蕾や摘果を適期に行い、果実肥大を促すことが重要です。
- ・地色のみでは収穫判定が難しいため、硬度、熟度、食味を加味する必要があります。
- ・灰星病、せん孔細菌病などには既存の品種と同様に罹病性のため、「日川白鳳」と同等の防除が必要となります。